

は し が き

山折哲雄

共同研究の報告書である。人によっては、共同研究の非共同論文集といつかもしれない。例によって例のごとくだ。

題して「日本人はキリスト教をいかに受容したか」。

平成五年から八年まで丸四年間をかけたものだが、参加した内外の研究者の数は伸べ四十六名に達した。「日本もしくは日本人とキリスト教」という枠でカバーできるテーマはほとんど出揃ったのではないだろうか。老若男女の入り混ったメンバー構成によって議論がいつも沸騰し、その熱気に押されてか研究会への出席も高率を保つことができたのは望外の幸せであった。

以上が自画自賛である。むろん何もかもがうまくいったわけではない。そこで自画自嘲の弁も加えておこう。

かつて偉いあるA先生がいった、——共同研究とは、一人の指揮者のタクトの下にシンフォニーを演奏するようなものである。

もう一人の偉いB先生がいった、——否、共同研究とは、専門

の異なった者が一つの土俵にのぼってつきつきと相撲を取るようなものである。

残念ながらわれわれの共同研究はことがそうは運ばなかった。A先生方式もとれず、さりとてB先生方式に落ち着くこともなかった。しいていえば、プロレスのリング上の乱闘、あるいは場外乱闘のくり返しであったような気がする。要するに整然とはいかなかったのである。

もう一つ。共同研究が終期を迎えるにあたって、私は参加者の各位に論文の作成をお願いした。普通の依頼の仕方ではお願いすればよかったのであるが、つい深い考えもなしに執筆枚数無制限、論文形式完全自由、といってしまった。その結果、とどけられた論文のなかに最高原稿枚数が四百字で百四十九枚というのがあるかと思うと、その論文形式を芝居仕立てにしたものまでが登場することになった。

身から出たサビとはいえ、あとの祭りである。

が、できたものは仕方がない。私は大満足してその全体を合し、ゆるやかなジャンル分けをほどこして本報告書のような体裁になったわけである。報告書の内容までが、リング上の乱闘、場外乱闘のありさまを呈することになったのは、これまた是非もない。

そのすべての責を負うのはむろん私であるが、最後にふたゝび、自画自賛と自画自嘲の意をこめてご執筆いただいた各位には深甚の謝意を表したいと思う。

平成一〇年二月一日